

我が国における在日コリアンに関する研究の動向： 在日コリアン青年の臨床心理学的問題を考えるため に

尹, 成秀
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/1686467>

出版情報：九州大学心理学研究. 17, pp.87-97, 2016-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

我が国における在日コリアンに関する研究の動向 — 在日コリアン青年の臨床心理学的問題を考えるために —

尹 成秀 九州大学大学院人間環境学府

Problems facing Zainichi Korean youth:

A clinical psychological study based on a review of prior research on Zainichi Koreans

Seongsu Yun (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

This study considers the problems facing Zainichi Korean youth in the field of clinical psychology by reviewing prior research. The term Zainichi refers to Korean residents of Japan. First, the author defines and lists the characteristics of Zainichi Korean youth, then explains the differences between them and other young adults in Japan who are foreign residents or ethnically Japanese. Next, the author reviews previous studies in sociology, education, medical science, and psychology. These studies mainly consider Zainichi Korean youths' identity, and suggest that they suffer from anxiety and conflicts regarding their interpersonal relationships with Japanese and other Zainichi Koreans. However, previous research has not sufficiently examined their anxiety and conflicts. Therefore, the author conducted a clinical psychological study on the problems facing Zainichi Korean youth in order to more deeply examine the issues of anxiety and conflict that arise in their interpersonal relationships.

Key Words: Zainichi Korean youth (Korean residents in Japan), interpersonal relationship, clinical psychology

I. 問題と目的

本研究は、臨床心理学の分野において在日コリアン青年の抱える問題を研究する際の視点を、近接分野である社会学、教育学、精神医学および心理学の在日コリアン研究について考察することを通じて検討したものである。

1. 我が国における在日外国人研究の動向

グローバル化、インターナショナル化という言葉が日常的に用いられるようになって久しい。現代においては世界的な規模で、人々が様々な目的のもとに越境し、母国を離れ生活しており、日本国内でも在日外国人人口は年々増加傾向にある。今日では約210万人の在日外国人が日本で生活しており、異文化で生活する彼らの抱える問題についての理解と支援は、我が国の臨床心理学の分野で重要な課題となっている。

日本における在日外国人の臨床心理学的研究は、特に留学生に関する知見を中心に蓄積がなされてきた(高井, 1989)。その中では、異文化における心理ストレス(モイヤー, 1987)、日本人との対人関係(高井, 1994; 横田, 1991)、日本文化に対する態度やソーシャルスキル(井上, 1997; 佐野, 1998; 田中・藤原, 1992)といった、異文化環境への適応に関する問題だけでなく、エスニック・アイデンティティ(大西, 2002)や分離個体化の課題(陳・角田, 2015)といったより深い心理的な問題についても検討がなされている。また、近年では

外国人労働者(井上, 2000; 大西, 2001)や外国人妻(浅海ら, 2011; 川瀬・相良, 2009)のように長期滞在者についても研究が行われている。こうしたこれまでの在日外国人を対象とした臨床心理学的研究においては、彼らが心理臨床的支援を必要としていることが指摘されている。

以上のように在日外国人に関する臨床心理学的研究を概観すると、渡日してきた短期滞在者から長期滞在者に関する研究が中心であり、特に青年期の者に関する研究が多い。しかし、在日外国人青年の中には日本で生まれ育った者たちも存在し、彼らの場合、母国から渡日してきた者とは課題が異なる可能性が示唆されている(秋山, 1998)。今日では、在日コリアン青年、在日中国人青年、在日フィリピン人青年、在日ブラジル人青年、欧米系の在日外国人青年など、様々な日本で生まれ育った在日外国人青年の存在が考えられるが、母国から渡日してきた者たちの研究と比較すると、彼らに関する臨床心理学的な研究は極めて少ない。しかし、定住外国人人口は年々増加しており、日本で生まれ育った在日外国人青年は今後増加していくことが考えられ、彼らの臨床心理学的な問題に関する知見の積み重ねは急務である。その際、藤岡(2013)が、在日外国人の課題を考える際には、在日外国人の集団内における差異や多様性について考慮する必要があると指摘しているように、いずれの在日外国人集団に関する研究であるのかが明確である必要がある。

2. 在日コリアン青年の臨床心理学的問題

日本で生まれ育った在日外国人青年について考えたとき、在日コリアン青年の存在があげられる。今日の在日コリアン青年については、社会学や教育学といった分野を中心に知見が蓄積されており、数は少ないものの心理学や精神医学の分野でも研究が行われている。しかし、臨床心理学の分野では在日コリアン青年に関する研究はあまり見られない。そのため彼らを対象とした心理臨床的支援を考える上で、彼らの存在や課題についてどのように理解しているのかわからないことも少なくないと考えられる。

本研究の目的 臨床心理学の分野で在日コリアン青年の抱える問題を考えていく上で、近接分野である社会学、教育学、精神医学、心理学の分野の研究は参考とすべき現状や知見が多いと考えられる。そこで、本研究では在日コリアン青年に関する研究を概観することで以下の3点について明らかにすることを目的とする。(1) 今日の在日コリアン青年の特徴について明らかにし、他の在日外国人青年や日本人青年との異同について整理する。(2) そうした在日コリアン青年の問題について、社会学・教育学・精神医学・心理学の分野ではどのように検討がなされてきたのかについて明らかにする。(3) (2)を踏まえて、臨床心理学の分野では在日コリアン青年の問題をどのような視点から研究していく必要があるのかを検討する。

II. 在日コリアン青年について

本章ではまず本研究で取り上げる在日コリアンについて定義し、今日の在日コリアン青年の特徴について人口統計資料や先行研究を概観し明らかにする。

1. 在日コリアンの定義

在日コリアンは「1910年8月からはじまる植民地支配の歴史的産物である」(姜・金, 1994)と述べられるように、その歴史は日本の朝鮮半島の支配に始まり、在日コリアン一世の渡日と日本での生活が出発点となる。

本研究における在日コリアンはいわゆるオールドカマーの在日コリアンを示しており、谷(1995)にならない

「戦前、戦中の日本の植民地支配のもとで朝鮮から日本へ来た者とその子孫で、韓国・朝鮮籍を持っているか、もしくは、たとえ日本国籍を取得した後も自民族への一体感や帰属意識をなほどこ抱きつつ日本に定住している人々」と定義する。この中で、「たとえ日本国籍を取得した後も自民族への一体感や帰属意識をなほどこ抱きつつ日本に定住している人々」を含む理由は、帰化者や国際結婚の増加によって、「日本国籍在日コリアン」や韓国・朝鮮籍と日本国籍を併せ持つ「ダブル」の存在が増加しているためである。なお、近年、韓国から渡日してきたいわゆるニューカマーの者は本研究には含まないこととする。

ここで呼称の問題について触れておく。オールドカマーの在日コリアンの呼称は、「在日朝鮮人」(曹, 2013), 「在日韓国人」(福岡・金, 1997), 「在日韓国・朝鮮人」(狩谷, 2000; 宋, 2001), 「在日コリアン」(金, 2001)など研究者によって様々である。こうした呼称の問題は政治色を帯びることもあり、金(2010)は、「在日朝鮮人という言葉以上に彼らの歴史性やエスニシティを的確に、また鮮明に表すことができる用語が存在しない」と主張している。一方で、近年では、未来志向的な意味で「在日コリアン」という言葉が用いられることも多い。そうした中で、宮内(1999)は、万人にとっての正しい呼称は存在せず、「エスニシティにまつわる呼称は当該時点における呼ぶ者と呼ばれる者との関係性が色濃く反映されている」と指摘している。つまり、彼らの国籍に基づいて在日韓国人や在日朝鮮人と称するのではなく、研究者が彼らの存在をどのように捉えているのかが彼らの呼称を考える上で重要であるといえよう。本研究では彼らの存在を規定する上で、実際の国籍ではなく彼ら自身の自民族への一体感や帰属意識を重視していることから、より中立的な呼称と考えられる「在日コリアン」を用いることにする。

2. 人口統計資料を用いた検討

Table 1は、1985年から2013年までの日本における全体の在日外国人人口の推移と、特に大規模な在日外国人集団である、韓国・朝鮮人、中国人、ブラジル人、フィリピン人の人口の推移を示したものである(財団法人)

Table 1 在日外国人総人口と国籍別在日外国人人口の推移

	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013
在日外国人総人口	850,612	1,075,317	1,362,371	1,668,444	2,011,555	2,134,151	2,325,608
韓国・朝鮮	683,312	687,940	666,376	635,269	598,687	565,989	549,795
中国	74,924	150,339	222,991	335,575	519,561	687,156	699,056
ブラジル	1,955	56,429	176,440	254,394	302,080	230,552	183,017
フィリピン	12,261	49,092	74,297	144,871	187,261	210,181	220,171
その他	78,160	131,517	222,267	298,335	403,966	440,273	673,569

Table 2 本研究で定義する在日コリアンに関する統計的推移

	1991	1996	2001	2006	2011
韓国・朝鮮籍人口	693,050	647,159	632,405	598,219	545,401
特別永住者人口	693,050	554,032	500,782	443,044	385,232
帰化者（韓国・朝鮮籍）	155,547	198,957	248,392	298,609	334,528

管協会, 1995, 2005, 2014)。

韓国・朝鮮人の人口は1947年の時点で約60万人であり、1953年までに帰国事業によって53万人にまで減少したものの(姜・金, 1994), その後はTable 1が示すように1990年までは増加を続け、それ以降は緩やかに減少している。1990年以降に急激に人口数が増加した中国人やフィリピン人、ブラジル人とは対照的といえる。ただし、注意したいのは、ここでの韓国・朝鮮人の数字の中には近年、就労や就学を理由に、あるいは在日コリアンや日本人の配偶者として渡日してきたニューカマーも含まれていることである。そこで、次に本研究における在日コリアンを考える上で、その大半を在日コリアンが占める「特別永住者」の在留資格者と韓国・朝鮮籍から日本国籍への「帰化者」の推移をTable 2に示す(法務省, 1991, 1996, 2001, 2006, 2011; 財団法人入管協会, 1995, 2005, 2014)。

Table 2を見ると、韓国・朝鮮国籍人口と特別永住者の人口数は共に減少傾向にあり、帰化者(韓国・朝鮮籍)は増加傾向にある。韓国・朝鮮国籍人口から特別永住者の人口を引いた数が、韓国籍のニューカマーの人口と考えてよいだろう。少なくとも1991年までは韓国・朝鮮籍の人口と特別永住者の人口に差異はなく、韓国籍のニューカマーが日本に多く渡航してきたのは1991年以降であることが窺える。また、Table 1で確認された、韓国・朝鮮籍の減少は特別永住者の減少として理解でき、その背景には日本国籍への帰化者の増加や、在日コリアン一世が亡くなりつつあることが推測される。

本研究が示す日コリアンの人口について、谷(1995)は、帰化者の「自民族への帰属意識や一体感」を測定することは現実的に不可能であることを前提に、「特別永住者」と「帰化者」の総数から1995年の時点で「最大見積もって約58万人の特別永住者と、約19万人の日本国籍取得者とを合わせた77万人、言い替えば、最小58万人から最大77万人の間、おそらく70万人前後」と推測している。

ここまで見てきた統計資料からは、他の在日外国人集団や韓国籍のニューカマーが1990年以降に爆発的に増加したのに対して、在日コリアンはそれ以前からより長期に渡って日本に定住していることが明らかである。長期にわたる定住は世代移行をもたらすことから、在日コリアンは他の在日外国人集団と比べて多世代化が著しく進行した集団であると考えられる。

3. 在日コリアンと日本社会

在日コリアンの歴史については、例えば、姜・金(1994)や水野・文(2015)が、在日コリアンの誕生から今日までの歩みについて、当時の史料をもとに詳細にまとめている。その中では、在日コリアンの誕生の背景には植民地支配による支配—被支配の関係性が存在したこと、定住の過程では就職差別をはじめとする様々な法的差別によって差別—被差別の関係性が存在したこと、法的差別と関連して在日コリアンの問題の一つに貧困の問題が存在することがたびたび強調されている。

さらに、日本社会における在日コリアンの問題の一つに、ステレオタイプと偏見の問題があげられる。これまでの日本人の人種・民族に関するステレオタイプと偏見についての実証的な研究(藤田b, 1982; 中村, 1999; 我妻・米山, 1967)が示すように、朝鮮民族に対しては、欧米系外国人や他のアジア系外国人と比べて、ステレオタイプ像が非好意的で、偏見が強い。近年では、在日コリアンに対するヘイト・スピーチが社会的な問題となっている(金, 2015; 中村, 2015)。

今日の在日コリアン青年が、以上のようなルーツを有しており、現在においても日本社会の中で困難な境遇にあることは、他の在日外国人との異同を考える上で重要であると考えられる。

4. 今日の在日コリアン青年の特徴

在日コリアンにおいては、祖国生まれの一世、その子である二世から、三世、四世へと世代的な移行が進んでおり、今日の在日コリアン青年は三世以降の若者である(福岡, 1993; 福岡・金, 1997; 宋, 2001; 谷, 1995)。

今日の在日コリアン青年の特徴は、福岡・金(1997)や金原ら(1986)の調査によると、7~8割以上の者が日常生活の中で日本名を用いて生活し、8割近いものが母国語(韓国語および朝鮮語)の読み書きができない。また、国籍に関しては、すでに述べたように、韓国・朝鮮籍だけでなく、日本籍を持つ者や日本籍と韓国籍もしくは朝鮮籍を合わせ持つダブルの者が増加している(井出, 2000; 谷, 1995)。祖国や自民族に対する態度は、一世や二世と比べて、個々に様々に多様化しているという(福岡, 1993; 山脇, 2000)。

生活環境の面では、民族学校に通う子弟は減少し(高, 2004)、7~8割の子弟は日本人と変わらない学校教育を受けている(姜・金, 1994)。法的側面に着目すると、

1970年代後半に在日コリアンと日本人が手を取り合っ
て本格的に起きた差別撤廃運動(田中, 2013)によって、
在日コリアンをめぐる法的差別は大幅に改善されてきた。
こうしたことから、宋(2001)は「一世と二世が、
主に日本の中で差別に対して抵抗、あるいは適応しなが
ら生の基盤を築くことに力を注いできたとするれば、三世
と四世を中心とした若い世代は、ある程度安定した生活
環境の中で日本の経済発展の恩恵を享受している」と述
べている。

以上のような特徴から、在日コリアン青年の場合、母
国から渡りしてきた者や他の日本生まれの在日外国人青
年に指摘される日本文化への適応の問題(井上, 1997;
佐野, 1998; 田中・藤原, 1992)や、言語の違いによる
親子間のコミュニケーションの問題(井上, 2006)は極
めて少ないと考えられる。また、彼らはもともと一見し
ただけでは日本人と見分けることができない「隠れたマイ
ノリティ(Hidden Minority)」であるが、今日の在日
コリアン青年は名前や国籍、生活環境など多くの点で日
本人青年との異同が少なくなり、両者の境界は増々曖昧
になっているといえよう。実際、在日コリアン青年自身
も、青年期になるまで自らが在日コリアンであることを
全く知らない、あるいは知らされていないことも少なく
ない(浜本, 1996)。以上のような在日コリアン青年の
現状について、「民族性の喪失の危機」と捉える見方も
あれば、「多様化」と捉える見方もある(金, 1998)。そ
の一方で、日本籍在日コリアンの存在からも窺うことが
できるように、自身のルーツや自民族への帰属意識を保
ち、在日コリアンであることを自覚しながら生活する者
も多いと考えられる。

Ⅲ. 社会学・教育学・精神医学・心理学の分野に おける在日コリアン青年に関する研究

本章では社会学, 教育学, 精神医学, 心理学といっ
た臨床心理学の近接分野において、在日コリアン青年の
問題をどのように考えられてきたのかについて概観す
る。

1. 社会学における研究

社会学の分野において在日コリアン青年が注目される
ようになったのは、1980年代の終わりからである。そ
の背景には、1) エスニシティの問題が社会学分野でク
ローズアップされ始めたこと、2) 南北朝鮮の抗争が
徐々に落ち着き、在日コリアン内部の政治的・社会的状
況が徐々に変容してきたこと、3) 特に若年層を中心に
民族組織離れが進行し、在日コリアン内においても青少
年層を対象に社会調査によって実証的かつ客観的に実情
を把握しようとする気運が高揚してきたという、社会学
分野と在日コリアン社会それぞれのニーズの高まりが
あったといわれている(福岡・金, 1997)。以下、本研
究で取り上げる社会学分野の在日コリアン研究を Table
3に示す。

社会学分野の研究では特に在日コリアン青年のアイ
デンティティの問題が注目され、インタビュー調査で得ら
れた彼らの語りをもとに検討が行われている。

福岡・辻山(1988, 1989)は、日本社会および日本人
からの偏見や差別の中で在日コリアンであることを隠
し、日本名から民族名に変更した在日コリアン青年の語
りから、在日コリアン青年のアイデンティティは「同化
された自己」と「異化された自己」の二重の要素の間を
揺れ動いていると考察している。前者は日本語を母語と
し、日本文化の中で生育する過程で身に着けた周りの日
本人たちと共通する考え方や価値観、生活様式を持つ自
己である。一方、後者は家庭や在日コリアン集住地域あ
るいは民族学校の中で受け継がれてきた民族文化の継承
によって培われた、周りの日本人との異質性を持つ自己
である。

福岡(1993)は、150名あまりの三世在日コリアン青
年へのインタビューの経験から、縦軸に「朝鮮人の被抑
圧の歴史への重視度」、横軸に「日本社会における自己
の生育地への愛着度」を置いた在日コリアン青年のアイ
デンティティの分類の枠組みを提案した。その分類は
「祖国志向」、「同胞志向」、「共生志向」、「個人志向」、「帰
化志向」の5類型からなり、後に「葛藤型」と「葛藤回
避型」を加えて「生き方の指向性7タイプ」として提案

Table 3 社会学分野における在日コリアン研究

研究者	研究内容	研究方法	研究対象
福岡・辻山(1988)	二つの間を揺れ動くアイデンティティ	インタビュー調査	三世在日コリアン青年
福岡・辻山(1989)	二つの間を揺れ動くアイデンティティ	インタビュー調査	三世在日コリアン青年
福岡(1993)	アイデンティティの類型モデル	インタビュー調査	三世在日コリアン青年
福岡・金(1997)	在日コリアン青年を対象とした意識調査	質問紙調査	三世在日コリアン青年が中心
山脇(2000)	福岡(1993)の類型モデルの検討	論考	—
狩谷(2000)	アイデンティティに関する検討	インタビュー調査	在日コリアン青年
井出(2000)	日本籍青年のアイデンティティ	インタビュー調査	日本籍在日コリアン青年
許(2000)	名前の使用とアイデンティティとの関連	インタビュー調査	在日コリアンの家族

している（福岡・金，1997）。

福岡を中心とする一連のアイデンティティ研究には批判も存在するものの（山脇，2000），在日コリアン青年のアイデンティティの多様性を明らかにした点で画期的な研究であり，その後の研究者にも影響を及ぼしている（許，2000）。ただし，初期の頃の研究で強調されていた在日コリアン青年の心の内にある二重の要素間の揺れ動きは，類型化によってあまり強調されなくなっている。

一方，狩谷（2000）は在日コリアン青年のアイデンティティの問題を，彼らが自己を問われる状況に遭遇した際に他者との関係性の中で問題になるものとして捉えなおした。その研究では，在日コリアン青年は，他者との間で自己を問われる際に民族名の使用や国籍へのこだわりによって，アイデンティティを管理・維持を試みることを指摘している。また，民族名を名乗る際には周りの日本人に在日コリアンであることを説明しなければならないが，日本名を名乗る場合も民族名で生活する在日コリアン青年にその理由を説明しなければならない状況に追い込まれる可能性について言及している。

近年では特に，名前や国籍を取り上げ，アイデンティティとの関連を検討した研究も行われている（許，2000；井出，2000）。

井出（2000）は，日本国籍の在日コリアン青年は自らが在日コリアンであるにもかかわらず日本国籍を有していることに複雑な心境を抱いており，彼らのアイデンティティのあり様は民族名の有無や母国語の習得といった「民族的オプション」の有無に大きく影響を受けると指摘している。また，彼らの胸中が複雑な背景には，日本社会や日本人からの差別や偏見のまなざしだけでなく，在日コリアン社会においても帰化は民族に対する裏切りとして捉えられてきたことがあると述べている。

以上の研究を概観してみると，社会学の分野では，在日コリアン青年のアイデンティティの問題を，民族名の使用や秘匿などの外的指標のあり様を通じて検討していることが窺える。その考察では，特に日本社会や日本人との間にある差別や偏見の問題が強調されるが，近年で

は，例えば，狩谷（2000）のように，同じ在日コリアン青年同士の関係性の中でも問題が生じることを示唆する知見も見られる。特に日本人との関係では，インタビューの語りに着目すると，「（日本人のクラスメイトや教師に対して）なぜ本名にしたのかを説明することが苦痛だ」（狩谷，2000），「友達に自分の身分を明らかにしたら，今までの人間関係が壊れるのが怖い」（福岡・辻山，1988）などの語りが見られ，彼らが不安や葛藤を抱えていることが窺える。研究者も「特に新しい社会関係の中に出ていくたびに，どのような名前を名乗るかという選択と心の葛藤を，幾度も経験している」（許，2000）と指摘しているが，そうした彼らの不安や葛藤について十分に考察がなされているとは言い難い。

2. 教育学における研究

本研究でとりあげる教育学の分野における在日コリアン研究を Table 4 に示す。

教育学の分野では，他の分野に先駆けて 1950 年代から今日まで主に在日コリアン子弟への民族教育に関する研究が行われている。これまでに多くの研究者によって，70 年以上にわたる民族教育の歴史や，当時の日本政府による抑圧と弾圧の問題，就職や進学にまつわる法的差別の問題，そして，民族教育の持つ意義や課題が議論されている（朴，2009；李，1959；田中，1987）。

在日コリアンの民族教育は終戦直後から始まり，当初は帰国の準備として祖国の言葉や歴史，文化を教えるための教育であった（李，1959）。しかし，今日においては，日本に永住し日本社会で暮らしながらも民族の尊厳と誇りを持って人間らしく生きるための教育であり，その教育政策においては民族性のみならず，在日同胞社会や日本社会そして国際社会に貢献し活躍するための教育であることが強調されている（朴，2009）。なお，民族教育の現場には，在日本朝鮮人総聯合会と在日本大韓国民団といった民族組織の民族学校と，大阪府を中心に取り組みが行われている民族学級がある。

近年の民族教育に関する研究の中には，インタビュー

Table 4 教育学分野における在日コリアン研究

研究者	研究内容	研究方法	研究対象
李（1959）	民族教育の現状と展望	論考	—
田中（1987）	民族教育の現状と展望	論考	—
金（1998）	アイデンティティと新しい民族教育のあり様	インタビュー調査	在日コリアン青年
金（2001）	アイデンティティと新しい民族教育のあり様	インタビュー調査	在日コリアン青年
宋（2000）	新しい民族教育としての民族学級	インタビュー調査	在日コリアン青年
朴（2009）	民族教育の現状と展望	論考	—
梁（2010）	民族学級での教育とアイデンティティとの関連	インタビュー調査	民族学級卒業生
曹（2012）	民族学校の役割	インタビュー調査	民族学校在学生
曹（2013）	民族学校教育とアイデンティティの関連	インタビュー調査	民族学校と日本学の在籍者

調査を通じて、民族学校の役割（曹, 2012）や民族教育がもたらすエスニック・アイデンティティへの影響（曹, 2013；梁, 2010）を検討しているものがある。

曹（2012）は、インタビュー調査の検討から、民族学校が日本各地に存在し、朝鮮学校在学経験者のネットワークを内実とする独自のコミュニティの結節点として機能することを指摘している。また、曹（2013）は、日本学校に在学する在日コリアン青年と民族学校に在学する在日コリアン青年へのインタビュー調査を行い、得られた語りの比較検討から、民族学校に在学する在日コリアン学生の場合、家族や親族以外の在日コリアンとの関係性が濃密な環境で生育し、学校では学生同士だけでなく教員を含めて、親密な関係を築いており、エスニック・アイデンティティの形成に深刻な心理的葛藤を抱えることが少ないことを指摘している。

梁（2010）は民族学級卒業生へのインタビューを行った。その考察では、民族学級との出会いを通じて、今までに全く学んだことのない異文化に近い民族学習を、最終的には親しい自己の文化として肯定的に受容できるようになることや、多数の同じ在日コリアンの子どもたちが民族学級に結集することが対象者の内面に安心感をもたらしていた可能性について言及している。

以上のように民族教育の肯定的な側面を明らかにした研究がある一方で、これまでの民族教育のあり様を反省的に振り返り、新しい民族教育のあり様を提案する立場の研究もある（金, 1998, 2001；宋, 2001；梁, 2010）。

金（2001）は、中学入学時に日本名から民族名を名乗るようになり、高校入学時には再び日本名を名乗りながら、自分のペースで在日コリアンであることを周囲に打ち明けている在日コリアン青年の語りを紹介している。その中で、本名を使い、在日コリアンであることを明らかにして生活することは、日本社会の現状の中では少なからず緊張を伴うものであるため、名前の選択は差別社会を生きていく上での便宜的な「戦術」であり、「柔軟なアイデンティティ」であると主張している。そして、これまでの民族教育が試みてきた「民族の自覚や誇りの確立」と「あるべき在日朝鮮人像」の追求は、このような「柔軟なアイデンティティ」を持つ今日の在日コリアン青年たちを抑圧しかねないことを指摘している。

また、梁（2010）も民族学級での教育に長年携わってきた経験から、在日コリアン青年の適応や違和感のあり様は千差万別であるのに対して、「あるべき民族像」の

尺度に基づいて行うこれまでの民族教育は、理念と子どもたちの実態との間で格差があり、場合によってはアイデンティティ形成にマイナスの影響を及ぼすと指摘している。

以上の研究からは、在日コリアン青年のアイデンティティ形成において民族教育の果たす役割の大きさと重要性が示唆される。同時に、そうした民族教育の場で、出会い、培われる同じ在日コリアン同士の関係性は、在日コリアン青年の内的側面に肯定的な影響をもたらすことが推察される。その一方で、そうした民族教育が今日の在日コリアン青年にとっては、ある種の抑圧として作用する危険性があり、在日コリアン青年のアイデンティティが多様化したことで、在日コリアンという同一集団内においても価値観のズレが生じ、心理的な問題が起こる可能性が考えられる。ただし、具体的にどのように抑圧が働き、その過程でどのような心理的な問題が生じるのかについては詳しく論じられていない。

3. 精神医学における研究

精神医学の分野における在日コリアン研究には黒川（2006）と金（2001）の研究があげられる（Table 5）。

黒川（2006）の研究は1980年代に行われたものである。黒川は、日本人および日本社会が在日コリアンの存在を規定する要因は、歴史的、政治的、社会的経済的、心理的など重層的であり、かつ、そうしたもろもろの要因によって形成された「差別構造」が彼らの存在を規定する中心にあると述べている。症例検討から、在日コリアンの場合、差別構造が存在するためにアイデンティティ形成において、欧米に住むエスニックマイノリティよりも同化に対する対抗性が顕著に表れやすいと指摘している。そうした彼らのアイデンティティのあり様について、日本的なものへの対立と葛藤を乗り越えるような形で形成された対抗同一性という概念を提案し、危機に陥った場合には対抗同一性が露呈したり、幻覚や妄想などの異常体験として出現する可能性について言及している。一方、在日コリアン患者の治療においては、差別構造の問題や民族性問題は軽視されやすいと、指摘している。さらに、治療者が自身の「内なる差別意識」に無自覚である場合には、患者の示す言動を被害的・猜疑的・衝動的・攻撃的なものと拡大解釈し問題患者であると見なしやすいと指摘し、在日コリアン患者の治療をめぐる治療者—患者関係について考察を行っている。

Table 5 精神医学分野における在日コリアン研究

研究者	研究内容	研究方法	研究対象
黒川（2006）	差別構造の問題がアイデンティティ・精神障害・治療関係に及ぼす影響	症例検討	一世・二世の精神疾患患者
金（2001）	アイデンティティの問題と特有の精神医学的ナリスク要因	症例検討	二世の精神疾患患者

金（2001）は、まず在日コリアンのアイデンティティの問題について言及し、在日コリアンの場合、青年期のアイデンティティ形成において民族的劣等感を内在化し、それに伴う自己否定といった葛藤が生じ、場合によってはそれらが深刻な外傷体験となりうることを指摘している。また、症例検討から、在日コリアンに特有の精神医学的なリスク要因として、1) 幼少期における民族的偏見によるいじめられ体験、2) 機能不全家族の中での生育、3) 民族的負のイメージの内在化、4) 社会的人間関係面での生きにくさや屈折した感情の実感の4つの問題を指摘し、それらを「在日症候群」と定義している。そして、在日コリアンの精神疾患のリスク要因は、個人の素質のみならず、社会文化的、家庭環境の問題の比重が大きいことについて言及している。

以上の精神医学の分野の知見は、社会学分野の研究で指摘される在日コリアンへの日本社会及び日本人の差別や偏見の問題が、単に彼らのアイデンティティ形成のみならず、精神医学的な問題のリスクをもたらす可能性を示唆するものである。また、対抗性の問題や自己否定の葛藤のように、アイデンティティのあり様そのものだけでなく、アイデンティティ形成のプロセスにおいて問題が生じることが推測される。ただし、取り上げられたケースは一世および二世在日コリアンのケースであることから、三世以降の今日の在日コリアン青年に直ちに当てはめて考えることには慎重である必要がある。

4. 心理学分野における研究

本研究でとりあげる心理学の分野の在日コリアン研究について Table 6 に示す。

他の分野と比較すると心理学分野の研究では、犯罪少年といった臨床群に関する研究と健常群に関する研究に分けられ、量的研究手法を用いている点が特徴的である。

臨床群に関する研究では、まず、小野（1967）や藤田（1982a）が、在日コリアンの非行少年の特徴として、貧困・多子・低文化家庭に代表される環境負因が中核にあることを指摘している。一方、藤田（1982b）は在日コリアン非行少年と日本人非行少年の民族的ステレオタイプ

と好悪感情について検討し、在日コリアン群は、日本人群と同様に欧米先進諸国に対して民族的劣等感を共有しているのに加えて、日本人に対しても民族的劣等感を併せ持っていることを指摘している。また、民族的劣等感は好悪順位の低い民族に投射されることで解消されるが、日本人群の場合、朝鮮民族などに投射して民族的劣等感を解消するのに対して、在日コリアン群では投射の対象となる民族集団が存在しないため、ともすれば脱朝鮮民族化や日本人化という形式で民族的劣等感を解消する可能性を指摘している。

健常群に関する研究では、まず、中村ら（1994）が、民族学校に通う中学生をエスニックマイノリティと規定し、日本人や日本文化との接触を彼らの異文化接触体験として捉え、それが彼らのエスニック・アイデンティティにどのような影響を及ぼすのかについて検討している。その結果、調査対象者の多くが日本人と親しく交流しているものの、自身の文化に対する日本人の理解については懐疑的で、162名のうち三割の者は、日本人との付き合いで差別的態度、言語的攻撃などで「嫌な思い」を経験していると報告している。

次に、平ら（1995）は、在日コリアン青年が対象や場面に応じて文化的アイデンティティの意識を強弱させる可能性について検討している。その考察では、高い民族意識を持ちながらも民族名と日本名を使い分ける一群の存在を指摘し、彼らのあり様を「しなやかな民族的アイデンティティ」と評している。また、そうした者達の特徴として、一貫して民族名や民族名の日本語読みを使う者と比べて、母国の歴史や文化、母語に関する知識が少なく、家庭内で日常的に民族に関する話題が乏しく、自身が在日コリアンであることを否定的に感じた経験が多いと述べている。

以上の心理学分野の知見では、精神医学分野の知見と同様に、在日コリアン青年においては、社会文化的な背景や家庭環境といった環境要因が臨床的なリスクとなりうることを示唆される。また、健常群の研究においては、他の分野の研究と同様に彼らのアイデンティティに関する研究が行われているが、心理学分野の特徴は、日本社会や日本人の偏見や差別の問題を念頭に置きながらも、

Table 6 心理学分野における在日コリアン研究

研究者	研究内容	研究方法	研究対象
小野（1967）	在日コリアン非行少年の特徴	面接調査	在日コリアン非行少年
藤田（1982a）	在日コリアン非行少年の特徴	質問紙調査	在日コリアン非行少年
藤田（1982b）	在日非行少年と日本人非行少年の民族的ステレオタイプと好悪感情	質問紙調査	在日コリアン非行少年、日本人非行少年
中村ら（1994）	民族学校中学生における日本人・日本文化との接触体験	質問紙調査	民族学校に通う中学生
平ら（1995）	日本人との対人関係のなかでのエスニックアイデンティティの変化	質問紙調査	在日コリアン青年

特に対人関係の場面について検討が試みられている点である。ただし、他の分野と同様に検討の中心はあくまで彼らのアイデンティティのあり様であり、例えば、中村ら(1994)のいう、日本人との間で経験する「嫌な思い」も、どのような気持ちなのかは不明確である。

IV. 在日コリアン青年の問題における臨床心理学的視座

本章ではこれまでの議論をふまえ、臨床心理学の分野で在日コリアン青年の問題をどのような視点から研究していく必要があるのかについて論じる。

1. 葛藤や不安などの臨床心理学的な問題への注目

近接分野のこれまでの研究では、在日コリアン青年の問題としてアイデンティティの側面が着目されてきたといえる。研究分野や研究者によって、アイデンティティ(福岡, 1993; 福岡・辻山, 1988, 1989; 狩谷, 2000; 梁, 2010; 金, 2001; 黒川, 2006; 山脇, 2000), エスニック・アイデンティティ(中村ら, 1994; 曹, 2013), 文化的アイデンティティ(平ら, 1995)など様々な用語が用いられているが、いずれも民族名や国籍, 自民族や祖国に対する態度, 名乗り行動といった彼らの民族性にまつわるアイデンティティを意味している。以下, そうしたアイデンティティを大西(2001)にならい, 文化的アイデンティティと呼び, 「個人がある文化的集団の一員として形成する自己概念, 所属感」(大西, 2001)と定義する。

これまでの研究から, 日本社会および日本人の差別や偏見の問題が彼らの文化的アイデンティティの問題に強く影響を及ぼしていることが示された(福岡・辻山, 1988; 金, 2001; 黒川, 2006; 中村ら, 1994)。さらに, 近年では, 同じ在日コリアン青年同士の関係性の中で問題が生じたり, 価値観のズレが生じている可能性が考えられた(狩谷, 2000; 金, 1998, 2001; 梁, 2010; 宋, 2001)。

また, 文化的アイデンティティをめぐる彼らには, 葛藤や不安(福岡・辻山, 1988, 1989; 福岡, 1993; 狩谷, 2000), 緊張感(金, 2001), 劣等感(藤田, 1982b; 金, 2001), 嫌な思い(中村ら, 1994)といった臨床心理学的な問題が生じ, それが深刻な場合には精神疾患のリスクになることが示唆された(金, 2000; 黒川, 2006)。彼らの適応を考える上では, 家庭環境(藤田, 1982a; 金, 2001; 小野, 1967)や教育環境(梁, 2010)といった環境要因も重要であることが考えられた。

一方, 先行研究の中で彼らの不安や葛藤などの臨床心理学的な問題は指摘されるにとどまり, 十分に検討が行われていないことが明らかになった。いったいなぜであろうか。一つは, 社会学分野で在日コリアン青年が注目

された背景から窺い知れるように, 研究者自身の問題意識によって, 在日コリアン青年においては文化的アイデンティティの問題が最も重要であると解されてきた可能性が考えられる。そのため, 研究上の関心は彼らの文化的アイデンティティの解明に注がれてきたのではないだろうか。次に, 教育学分野の研究(金, 2001; 朴, 2009)から窺うことができるように, 在日コリアン内においても文化的アイデンティティの問題が最も重要な課題として捉えられてきたことが考えられる。在日コリアンの教育の歴史は日本社会からの「同化」の圧力への「抵抗の歴史」であり(金, 2000), 在日コリアンにとって文化的アイデンティティの継承と保持が何よりも優先されてきた。そのために, 自らの臨床心理学的な問題への関心は相対的に低くなっていた可能性が考えられる。このように, 在日コリアン青年の研究に取り組む研究者と在日コリアン双方の事情によって, 彼らの不安や葛藤, 劣等感といった臨床心理学的な問題については指摘されるにとどまってきたと思われる。しかし, 在日コリアン青年に対して心理臨床の支援を行う際には, そうしたもろもろについての深い理解が必要不可欠である。なぜならば, 心理臨床における援助の役割は, 彼らの文化的アイデンティティのあり様を評価し, 教育することではなく, 自らの文化的アイデンティティのあり様のままに生きることが難しい, 彼らの生きづらさに寄り添い, 共に考えていくことが求められるためである。したがって, 臨床心理学分野においては, 近接分野のように彼らの問題をただちに文化的アイデンティティの問題として捉えるのではなく, むしろ, 彼らの不安や葛藤, 劣等感についてより詳細な検討を行っていく必要があると考えられる。

2. 在日コリアン青年の臨床心理学的問題と対人関係

在日コリアン青年の臨床心理学的問題について検討を行うにあたって, 本研究では在日コリアン青年の対人関係の問題について着目することを提案したい。

近接分野の先行研究における在日コリアン青年へのインタビューでは, 自身が在日コリアンであることを目の前の日本人の友人に対して伝えることへの不安や葛藤にまつわる語りが見受けられる。先行研究ではこのような語りから, 例えば, 日本社会や日本人の差別や偏見の問題によって自らをありのままに表現することが困難であると指摘し, 文化的アイデンティティの問題について言及している(福岡・辻山, 1989)。しかし, こうした語りから示唆するのは, 彼らは, 目の前の相手に自らが在日コリアンであることを明らかにすることで拒絶されることや, それまで親密だった相手との関係性が変化してしまうことに不安や葛藤を感じているのであり, その瞬間, 彼らの実感としては生じるのは, 文化的アイデン

ティティの問題というよりも対人関係の問題ではないだろうか。文化人類学者である原尻（1998）は、在日コリアンを対象としたフィールドワークの経験から、在日コリアンが民族名を名乗る・名乗らないという問題は、名乗れない相手との関係の問題であると指摘している。そして、在日コリアンの臨床心理学的問題を理解するには、在日コリアンの子どもの日常生活場面での日本人の子どもとの関係について詳細に明らかにされる必要があると述べている。この指摘は、在日コリアン青年の臨床心理学的問題は、彼らの文化的アイデンティティのあり様由来するというよりも、幼少期から培われてきた対人関係のあり方に由来することを強調している。こうしたことから、彼らの臨床心理学的な問題を彼らの対人関係の問題の文脈から検討を行うことには意義があると考えられる。

近接分野の先行研究からの示唆として、在日コリアン青年は、日本人との関係（福岡・辻山，1988，1989；中村ら，1994），同じ在日コリアン同士の関係（狩谷，2000；金，2001），そして家族との関係（藤田，1982a；金，2000；黒川，2006；小野，1967）といった対人関係において、臨床心理学的な問題が生じている可能性が考えられる。このうち、家族関係については、金沢（2011；2012a；2012b）が臨床心理学的研究を試みている。金沢は在日コリアンの中学生（金沢，2011）と高校生（金沢，2012a）を対象に、親子関係と青年期危機との関連について質問紙調査を行い、一連の研究の総括として、在日コリアン青年の親子関係は全般的にしつけの厳しさや要求の高さが特徴としてみられることを示した（金沢，2012b）。しかし、それは多くの在日コリアンの子どもにとって拒絶を感じるほどの深刻なものではないという。ただし、母親のしつけの厳しさの背景には、在日コリアンの親子関係における世代間境界の問題やはく奪と羨望の問題が反映している可能性があるとして論じている。この金沢の研究は量的研究としてサンプル数が不十分であり、今後、さらなる研究が求められる状況であると考えられる。

3. まとめと今後の課題

本研究の目的は、近接分野の在日コリアン研究を概観し、臨床心理学の分野で在日コリアン青年の問題についてどのような視点から研究を行う必要があるのかを検討することであった。

これまでの近接分野の在日コリアン青年を対象とした研究においては、主に彼らの文化的アイデンティティの問題について検討が行われてきたが、臨床心理学の分野においては、彼らの不安や葛藤といった臨床心理学的問題についてより深く理解するために、彼らの対人関係に着目することが重要であることが示唆された。

したがって今後は、実証研究や臨床実践を通じて、彼らの対人関係の問題について明らかにしていく必要がある。

〈謝辞〉

本論文の執筆にあたりご指導賜りました九州大学大学院人間環境学府教授 福留留美先生に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 秋山 剛（1998）. 異文化間メンタルヘルスの現在. *こころの科学*, **77**, 14-22.
- 浅海健一郎・安庭香子・野島一彦（2011）. 外国人母親の育児ストレスと精神的健康, および自己開示との関連－日本人母親との比較を通して－. *九州大学心理学研究*, **12**, 147-157.
- 藤岡 勲（2013）. 文化的マイノリティに対する心理援助再考－コレクティブ・アイデンティティ発達理論による検討－. *臨床心理学*, **13**(3), 412-420.
- 藤田裕司（1982a）. 在日朝鮮人の非行に関する研究. 序報－三世少年についての統計的考察－. *犯罪心理学研究*, **19**(1・2), 31-37.
- 藤田裕司（1982b）. 在日朝鮮人の非行に関する研究－2－民族的ステレオタイプと好悪感情をめぐって－. *犯罪心理学研究*, **19**(1・2), 39-45.
- 福岡安則（1993）. 在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ. 中央公論社
- 福岡安則・金 明秀（1997）. 在日韓国人青年の生活と意識. 東京大学出版会
- 福岡安則・辻山ゆき子（1988）. 同化と異化のはざままで (1)－在日韓国・朝鮮人三世のアイデンティティ－. *千葉県立衛生短期大学紀要*, **7**(2), 69-80.
- 福岡安則・辻山ゆき子（1989）. 名乗ることへの恐れとその背後構造－同化と異化のはざままで(2)－. *千葉県立衛生短期大学紀要*, **8**(1), 63-78.
- 浜本まり子（1996）. 在日朝鮮人－在日朝鮮人のアイデンティティの問題. 青木保他（編）*移動の民族誌*. 岩波書店
- 原尻英樹（1998）. 日本定住コリアンのメンタルヘルス－強いられる「こころ」の問題－. *こころの科学*, **77**, 23-28.
- 許 点淑（2000）. 在日韓国・朝鮮人社会における姓名の諸相. *人間科学研究*, **2**, 193-206.
- 法務省（1991）. 法務年鑑. 法務大臣官房司法法制調査部司法法制課
- 法務省（1996）. 法務年鑑. 法務大臣官房司法法制調査部司法法制課

- 法務省 (2001). 法務年鑑. 法務大臣官房司法法制調査部司法法制課
- 法務省 (2006). 法務年鑑. 法務大臣官房司法法制調査部司法法制課
- 法務省 (2011). 法務年鑑. 法務大臣官房司法法制調査部司法法制課
- 井出弘毅 (2000). 日本籍コリアンのアイデンティティに関する考察－「出自」をめぐる語りから－. 東洋大学大学院紀要, **37**, 39-54.
- 井上晶子 (2000). アジア系ムスリム就労者のストレス対処－バングラデシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に－. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **39**, 255-264.
- 井上孝代 (1997). 留学生の文化受容態度とカウンセリング. カウンセリング研究, **30**(3), 216-226.
- 井上孝代 (2006). 異文化接触と第一世代・第二世代－身体(からだ)とところとコミュニティ－. 異文化間教育, **24**, 63-75.
- 姜 在彦・金 東勲 (1994). 在日韓国・朝鮮人 歴史と展望. 改訂版. 労働経済社
- 金原左門・石田玲子・小沢有作・梶村秀樹・田中 宏・三橋 修 (1986). 日本のなかの韓国・朝鮮人, 中国人 神奈川県内在住外国人実態調査より. 明石書店
- 金沢 晃 (2011). 在日コリアン青年の青年期危機と親子関係について－中学生を対象として－. ところと文化, **10**(2), 159-166.
- 金沢 晃 (2012a). 在日コリアン青年の青年期危機と親子関係について－高校生を対象として－. ところと文化, **11**(1), 73-80.
- 金沢 晃 (2012b). 在日コリアンの心性に関する臨床心理学的研究－母親面接事例の研究と青年を対象とした実証的調査の結果との照合を通して－. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **38**, 1-21.
- 狩谷あゆみ (2000). 「在日である」／「在日をする」／「在日になる」－在日韓国朝鮮人の若者のアイデンティティについて－. 広島修大論集, **41**(1), 197-217.
- 川瀬洋子・相良順子 (2009). 在日韓国人の母親における異文化ストレスと関連要因の検討－ニューカマ(New Comer)の場合－. 児童学研究: 聖徳大学児童学研究紀要, **11**, 19-26.
- 金 長壽 (2001). 在日コリアンのアイデンティティと精神障害－特に在日症候群について－. 日本パブテスト連盟・熊本「同化発言」差別事件に取り組む担当者会
- 金 尚均 (2015). ヘイト・スピーチの害悪. コリアン・スタディーズ, **3**, 28-40.
- 金 泰泳 (1998). 「在日」のはざまを生きる子どもたち. 解放教育, **28**(8), 63-71.
- 金 泰泳 (2000). 在日朝鮮人教育のアイデンティティ. 解放教育, **30**(3), 30-38.
- 金 泰泳 (2001). エスニック・アイデンティティとは何か－在日朝鮮人教育の場合－. 解放教育, **31**(1), 40-46.
- 金 亨洙 (2010). 歴史的視座から見る「在日」の呼称問題. 国際文化研究, **16**, 57-70.
- 高 賛侑 (2004). ルポルタージュ 在日&在外コリアン. 開放出版社
- 黒川洋治 (2006). 在日朝鮮・韓国人と日本の精神医療. 批評社
- 水野直樹・文 京洙 (2015). 在日朝鮮人－歴史と現在－. 岩波書店
- 宮内 洋 (1999). 私はあなたの方のことをどのように呼べば良いのだろうか? 在日韓国・朝鮮人? 在日朝鮮人? 在日コリアン? それとも?－日本のエスニシティ研究における〈呼称〉をめぐるアボリアー. コリアン・マイノリティ研究, **3**, 5-28.
- モイヤー康子 (1987). 心理ストレスの要因と対処の仕方－在日留学生の場合－. 異文化間教育, **1**, 81-97.
- 中村一成 (2015). ヘイト・スピーチ問題の現在－被害実態から考える－. コリアン・スタディーズ, **3**, 16-27.
- 中村 真 (1999). 日本人の人種・民族ステレオタイプと偏見. 現代のエスプリ, **384**, 87-98.
- 中村俊哉・慎 栄根・平 直樹・川本ひとみ・横山恭子・高田夏子 (1994). 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験. 教育心理学研究, **42**(3), 291-297.
- 大西晶子 (2001). 「外国人労働者」のストレス対処と相互援助組織の役割. コミュニティ心理学研究, **4**(2), 107-118.
- 大西晶子 (2002). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー－文化的アイデンティティ研究を中心に－. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **41**, 301-310.
- 小野直広 (1967). 在日朝鮮人少年の非行におよぼす社会的要因. 犯罪心理学研究, **4**(1), 1-8.
- 朴 三石 (2009). 在日朝鮮人学校教育の現状と課題. アジア教育研究, **2**(1), 57-66.
- 李 東準 (1959). 在日朝鮮人教育の現状と展望. 教育, **9**(5), 30-37.
- 梁 陽日 (2010). 在日韓国・朝鮮人のアイデンティティと多文化共生教育－民族学級卒業生のナラティブ分析から－. Core ethics, **6**, 473-483.

- 佐野秀樹 (1998). 心理学的異文化理解－日本版カルチャー・アシミレーター作成の試み－. カウンセリング研究, **31**(1), 34-42.
- 宋 基燦 (2001). 在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開. 京都社会学年報, **9**, 237-253.
- 高井次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括. 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, **36**, 139-147.
- 高井次郎 (1994). 日本人との交流と在日留学生の異文化適応. 異文化間教育, **8**, 106-116.
- 平 直樹・川本ひとみ・慎 栄根・中村俊哉 (1995). 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて. 教育心理学研究, **43**(4), 380-391.
- 田中 宏 (1987). 日本社会の“病める姿”を反映－在日朝鮮人教育をめぐる現状と課題－. 教育評論, **486**, 18-23.
- 田中 宏 (2013). 在日外国人－法の壁, 心の溝－第三版. 岩波新書
- 田中共子・藤原武弘 (1992). 在日留学生の対人行動上の困難－異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討－. 社会心理学研究, **7**(2), 92-101.
- 谷 富夫 (1995). 在日韓国・朝鮮人社会の現在 地域社会に焦点を当てて. 駒井 洋 (編) 定住化する外国人. 明石書店, 133-161.
- 陳 坤昊・角田京子 (2015). 在日中国人留学生における異文化適応と青年期分離個体化. こころと文化, **14**(1), 58-72.
- 曹 慶鎬 (2012). 在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察－朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通じて－. 移民政策研究, **4**, 114-127.
- 曹 慶鎬 (2013). 在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究－日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に－. 多言語文化－実践と研究, **5**, 100-120.
- 山脇啓造 (2000). 在日コリアンのアイデンティティ分類枠組に関する試論. 明治大学社会科学研究所紀要, **38**(2), 125-141.
- 横田雅弘 (1991). 留学生と日本人学生の親密化に関する研究. 異文化間教育, **5**, 81-97.
- 我妻 洋・米山俊直 (1967). 偏見の構造－日本人の人種観 (NHK ブックス 55). 至誠堂
- 財団法人入管協会 (1995). 在留外国人統計
- 財団法人入管協会 (2005). 在留外国人統計
- 財団法人入管協会 (2014). 在留外国人統計